

## 日仏交流講演会要旨

日時：平成 28 年 12 月 19 日（月）15:00～16:30

場所：富岡製糸場東置繭所

演題：「富岡製糸場が日仏交流に果たす役割」

講師：外務省在リヨン領事事務所長 小林龍一郎 氏

私にとって、富岡の方々との交流というのは、リヨンとのつながりの文脈の中で申し上げて、非常に意味のあるものとなっています。

私は、フランス語を専門とする職員として外務省に入省し、1995 年から 1997 年までにリヨンで研修をしました。その時に、リヨンの方々とよくお話をしました。

リヨンの方々がおっしゃるのは、「リヨンは、絹の街である。リヨンは絹でもっているのだよ。」ということです。そして、私に日本とリヨンとの関係も教えてくれました。

そのことがずっと頭に残ってしまっていて、それから何かのご縁でしょう、リヨンの所長に相成りました。外務本省から「リヨンの所長になれ」と言われたときに、パッと頭に浮かんだのは、何とかして絹のイベントをやりたいなということでした。

人生というのは面白くて、ほぼ同じタイミングで、富岡製糸場がユネスコ世界遺産に登録されるということがありまして、たまたま文化庁で当時担当していた室長が、パリ大使館で一緒に机を並べて、仕事をしていた仲間でした。彼からも連絡があり、「ぜひ、リヨンで世界遺産登録に関する大きなイベントをしてはどうか？」と言われました。すべての条件がこれほど揃う場合は、やるべきである、と思ひまして、思い切って案件をこしらえました。

通常、外務省というのは、「在外公館文化事業」と言いますが、在外公館が独自に行う文化行事というのは案外限られていて、規模もそれほど大きくなく、マンパワーに限界があるので、案件数も多くはこなせられません。そういう意味では、日本の文化外交事業の一端は、国際交流基金にお任せしているということもできます。

「絹が結ぶ縁」については、「在外公館文化事業」として、外務本省のバックアップを受け、なおかつ文化庁に大変頑張っていただき、全体として上手くいくことになったのですが、実は、この背景にあるものは、富岡の皆様のおかげであると思っています。なぜならば、富岡の皆様がこれほど努力をして、世界遺産登録にこぎつけることがなければ、リヨンであのように大きなプロジェクトがそもそもできなかったからです。

そういう意味では、強い意志と目的意識を持って、富岡製糸場を残されたという事実に対して、これまでの製糸場関係者の皆様に、私は完全にシャポーを脱ぐとともに、本当に素晴らしいことであると思った次第です。そして、この情熱を、何とかしてリヨンの人と一緒に分かち合いたいと思いました。

さて、リヨンでございますが、フランス第2の都市です。第1位はもちろんパリですが、マルセイユの人はマルセイユが第2の都市と言い、リヨンの人は、リヨンが第2の都市と言います。人口規模でいうと、リヨンの方が第2の都市となっていて、140万人くらいです。

実はリヨンは、人口で第2の都市という以上に特徴がございます。古くからヨーロッパを代表する絹織物の産地です。既にチャイナシルクが、シルクロードを渡ってヨーロッパまで行っていました。そのころに、リヨンは大変な繁栄を迎えます。元々リヨンは、ローマの時代からあり、スイス、イタリアに抜ける交通の要所として古くから栄え、14、15世紀辺りから絹織物の産地が盛んになり、欧州屈指の都市に発展したそうです。

私も知らなかったのですが、絹織物とは面白い産業で、これに付随して色々な産業が同時に刺激を受けて発達していくのです。例えば、染め物などの化学、あるいは機械、織機が発達してエンジンをつくるなどが挙げられます。これは、フランスの産業史の中で言うと非常に意味のあることで、リヨンがフランスの産業革命をリードしたと言われています。

フランスは5つか6つの家族、いわゆる財閥が、フランスの産業発展に重要な役割を果たすと言われており、例えば、熱気球やその他多くの発明でフランス産業革命をリードしたモンゴルフィエ家などがあります。その他多くの富豪家族がほぼリヨンに集中しているのです。因みに、モンゴルフィエの末裔エミールは、明治維新以降日本に来て、多くの写真と共に日本の文化をフランスに持ち帰っています。

これらの結果、何が起きたかと言うと、鉱業や先ほど話した絹織物から発達した様々な分野の技術開発などでイノベーションが行われてきました。そうすると、リヨンで様々な分野の技術が発達し、エンジニアが生まれてきました。そのエンジニアの中のひとりがポール・ブリュナであります。

皆様ご存じのように、ポール・ブリュナはこの富岡製糸場をつくった人です。その他にも、レオンス・ヴェルニーは横須賀製鉄所をつくりましたし、生野鉱山を開発したのもフランス人です。このように、多くのフランス人が明治維新の前後に来て、その多くがリヨン及びリヨン周辺の出身であったということからも、リヨンが産業革命の中心であったことが伺えます。そして、その理由が絹織物にあるという、非常に長いストーリーの中にある「絹の交流」なのです。

第1次シルクロードでは、チャイナシルクがリヨンに運ばれ絹織物になりました。ヨーロッパ最古の証券取引所もリヨンにあり、現在の商工会議所となっています。市長にも参加いただいた討論会が行われた場所です。その証券取引所の天井に見事な天井画があるのですが、正面にライオンがいます、ライオンはリヨンのシンボルです。右にひげを生やした白人らしき人が複数おり、一番左にアジア人のような人がいます。このアジア人は誰かと尋ねたら、中国人であるとのことでした。第1次シルクロード時、中国から来たシルクがリヨンに運ばれ、絹織物に化けるということを表しているとのことでした。

ところが、1855年大変なことが起きます。リヨンで蚕の病気が発生し、その病気に耐え

られるような蚕を日本より輸入することになり、そこで初めてリヨンにおける日本との関係が生まれます。当時は、日本から蚕の卵を輸入していましたが、明治政府が、「日本で上質なシルクを生産し、輸出商品としてフランスに持っていくことが考えられないか」ということで富岡製糸場が設立されたと聞いています。

よくパリの人と言い合いになるのですが、「日本とフランスの歴史というのは、パリと東京の歴史ではなく、リヨンと横浜であり、リヨンと富岡の交流を示すものなのだよ」ということを私はよく言いますし、これが事実です。ところが、これを知らないフランス人があまりにも多い、というよりほとんど知らないのです。この知られていない状況に対しての不満と言うか、もっと事実を知ってもらいたいということを感じて、リヨンで「絹が結ぶ縁」という大変大きなイベントを行いました。これは、世界最小のマイクロ公館であるリヨン事務所が行う在外文化事業としては、破格の規模の行事となりまして、その分反応も極めて大きいものでした。これは後ほどお話いたします。

ここで、私が大前提として申し上げたいのは、リヨンの人たちが、絹に対して愛情・愛着を持っており、古いリヨンの方は、リヨンが横浜や富岡と密接に関連していることもよく知っています。しかし、国レベルでは知られていないので、大きなことをやって、何とかしてみんなに目を向けてもらうというのが私の大きな野望でした。これも尊敬する市長がいなかったら実現できませんでした。外務本省としても、年間を通じて素晴らしい行事のひとつであると今でも言われています。

さて、富岡製糸場が日仏交流に果たす役割ということですが、実は、「絹が結ぶ縁」の実施後、様々な方面から反応が返ってきています。

リヨンに古くから絹の組合があるのですが、この絹の組合は、なかなか保守的です。リヨンは第2の都市と申しましたが、なかなか入り込めないところがあります。リヨンの人は、人懐っこいですが、壁を作ってしまうところがあり、京都のように入り込み難いところがあると言われてきました。そこを何とかこじ開けなければならず、それが私の仕事だと思いました。

ところが、リヨンの人は「絹」をキーワードとして接触しますと、不思議なことにもものすごく心を開いてくれます。イベントが終わった後に、絹の組合が最初に反応を言ってきてくれました。それがもっと如実に現れたのは、その絹の組合の寄合に、私に入ってくれという連絡があったということです。よくよく話を聞いたら、リヨンの絹の組合で行われている「マルシェ・ド・ソワ」という絹市があるのですが、その絹市を7年続けていて、新鮮さに欠けてきているので、何か知恵を出してくれないかということでした。あのイベントをやった日本だったら何かやってくれるのではないかということ、話をしてきたのですが、結局彼らの落ち着いた結論としては、これをもっと国際色豊かなものにしていこうということでした。国際色豊かなものにするに当たって様々なアイデアを申しあげ、その中では例えば富岡が積極的に動いているので、富岡市などとも協働すべきという話も申

上げました。

リヨンの方は、なかなか手ごわいところもあるのですが、先ほど申したとおり、いったん入り込むと、物事が流れていくところがあります。富岡市の全面協力の下、リヨンと富岡の交流の歴史に大きな流れを作ることができましたので、これから、リヨンと富岡がもっとつながっていくのだと私は思っています。

1884年に、日本はリヨンに総領事館を開設しました。これが閉じるのが1937年で、その間約50年間、総領事館がきちんとあって、絹を通した日本外交が行われていたのです。今の領事事務所ができたのは2003年からで、現在に至ります。

外務省の組織も、できてすぐに何かできるという訳ではなくて、10年くらいかかって、人脈やリヨン社会との関係が構築されますので、そういう意味では、これから本格的に在リヨン事務所の活動が活発に展開していくことが期待できます。そして、やはりフランス第二の都市ですから、それに応じた、フランスにおける日仏交流の拠点の一つとしての役割を今後は持ってもらいたいと思っています。

次に、日仏交流が今後どのようなようになっていくかということです。皆さんにイメージしていただきたいのですが、ポール・ブリュナー一行のフランス人たちが1870年代に日本にやって来ましたが、ものすごく遠くから来ています。当時はマルセイユから船に乗って、何週間もかけてインドを通過してやってくる。そんな時代に、富岡は既に外国人を受け入れている訳です。

今後の日本の絵姿を考えた場合に、社会の様々な分野で、いかに外国人と摩擦なく接し、より豊かな社会を作っていくか、という大きなテーマを我々日本国民は突きつけられていると思います。

例えば2003年小泉政権時に「ビジット・ジャパン」というキャンペーンが開始しました。その当時、2003年でフランスから来た訪日観光客は8万5,000人です。ところが、2015年には23万人となりました。2011年に震災がありまして、特に、フランスからの観光客数は、がくっと落ちております。これがもし起きていなければ30万人くらいになっていたかもしれない。さらに言うと、2016年は、予想ですがトータルで2,400万人の外国人が来ることになります。もちろん、多いのは中国、韓国からのお客様ですが、ヨーロッパがとも増えています。特に、フランスが増えていると言えます。

外国人がこれだけ日本に来てくれている中で、外国に行かずとも日常生活を通して外国との接点が可能な日本になり、そして日本の社会構造、少子高齢化社会、今後の社会保障・税負担を誰がどうするのだということを考えたときに、若干外務省の範疇を超えてしまっていますが、日本の社会を真剣に考える一人としてあえて物を申すとすれば、外国との接し方を我々はもっと真剣に考えなくてはならないと思っています。

先般、とある教育関係者と話す機会がありました。彼が作ろうとする学校は、日本人と外国人を半々生徒を受け入れて、廃校となった小学校を活用して、使われなくなった古民

家を寮にして開放して、日本人と外国人が同じキャンパスの中で生活してもらおうという、国際化教育を軸に、国際派日本人の育成に焦点を絞ったものです。

住民説明会の中で議論になったのが、「外国人がここに来ることによってどのようなデメリットがあるか、あなたは考えたことがあるのですか？」ということであつたらしく、ここから、議論が始まるわけです。

何が言いたいかという、日本人は、外国との接点の中で、意識的に慣れていない部分が多いということです。鎖国を解いて 150 年となりますが、あまり変わっていないのです。そのようなことを思っていました、富岡は違うのです。全国の中でいち早く外国人を受け入れて、一緒に生活し、摩擦もなく過ごしているのは、なんと素晴らしいことなのだろうと思うわけです。

もちろん、外国人なので、日本人と同じ価値観は持っていませんし、ひょっとしたら逆の価値観を持っている人もいます。つまり、価値観というのは、良いことと悪いことを考えたときに、日本では正しいことかもしれませんが、ある国では全く逆かもしれないということが多々ある訳です。

そのような中で、どうやって外国の方に礼儀正しく、日本の持っている素晴らしさを維持しながら、彼らとの間で良好な関係を保ち、双方が幸せになるような社会をつくっていくかということが、これから重要になっていくと思います。これからというのは、2050 年くらいを想定しております。もちろん、2050 年に私が生きているかどうかは自信がないのですが、2050 年くらいを考えて、物事を考えなければならないと思います。なぜ、2050 年を考えるかというと、世界の人口分布がどんどん変わってきて、日本の人口について言えば 1 億人を切るようになるようです。経団連が作った「グローバル・ジャパン」というレポートがありますが、世界の人口が 2050 年には、トータルで 20 億人増加して、一番増えるのはインドで、次に中国です。一方、日本は 1 億人を切るとあります。ある意味で、人口は国力を構成する重要な要素ですので、今後日本の国力は下がっていくと、これはもう目に見えています。

日本は、経済第 3 位の大国です。まだ、第 2 位と思っていらっしゃる方もいるかもしれませんが、第 3 位です。やがて 4 位になるかもしれません。

そういった中で、中の上くらいであれば良いのかな、偏差値 60 くらいあれば良いのかなと日本国民全員がそう思うのなら、それはそれでよいのかもしれません。でも、おそらく国際社会でみると、今の日本は偏差値 78 とか、80 とかのスーパー大国なのです。

フランス人と接していても、やはり「日本はすごい」「素晴らしい」と皆さん口を揃えて言います。日本の悪口を本気で言う知識人層は、私の知る限り一人もいないです。

日本について、私自身が感じるネガティブな部分はたくさんありますし、それが外国にとって奇異に映ることもよく分かっています。しかし、日本が世界に誇れる国だということも同時に私の強い信念として持っています。ですので、素晴らしいこの国がちょっと落ちたような国になるということを皆様の孫子の代が甘んじて受け入れる、ということであ

れば、それはそれで私は構わないのですが、もし、今の水準か、わずかに落ちるくらい  
の水準を保ちたいのであれば、今色々なことを考えなくてはいけないということです。

これは、外務省というよりは、日本政府全体で考えていくべき話だと思います。外務省  
は、日本国とよその国との関係をつかさどることが、主たる仕事です。外国人を日本に受  
け入れる時に、入国管理から在留管理、これをしっかりやりましょうというのが法務省で、  
外務省はビザを発給します。ビザは、別名「異議なし状」と言ひまして、「Aさんという方  
が、日本国内に入ってくることは、我々は異議がございません」というものです。  
したがって、ビザイコール在留資格ではないのです。在留状態を管理する省庁は、法務省  
の入国管理局というところなんです。外務省はそこまでタッチできないのです。

そういうことを考えると、少しもどかしいというか、外務省ができることは限られてい  
るので、これからも外国人にどんどん日本に入ってきていただくわけですから、色々な  
形で国家の形態やあるいは社会の形態を、伝統ある日本の良いところが維持されながら、  
どうやってハーモナイズさせていくかということ、国民全員が考えて知恵を出し合っ  
ていくべきだと思います。「万機公論に決すべし」と五箇条のご誓文にあります。明治天皇が  
ご立派だったと思うのですが、国民全員が考えて知恵を出し合うことによって、それと同  
じような第2の開国に、やがて日本は至るのではないかと思います。

繰り返しますが、ここ富岡というのは、明治維新のときに、既に外国人技術者を受け入  
れ、一緒に巨大大業を成功させているのです。私は、富岡市が、歴史の中で外国人をしっ  
かり受け入れてきたということに思いを馳せる時に、この市が果たす役割というのが、あ  
るのではないかと考えております。

ここからは、私の夢の話になっていくのですが、同じような考えで、それぞれの市町村  
の活性化、国際化を考えていかなければいけない時期が、黙っていてもやがてやってき  
ます。その時に、「富岡モデル」というものをぜひ作っていただきたいと思います。外国との  
交流の中で、非常に上手く外国人との接点をポジティブな形で受入れて、かつ寛容であ  
って、日本の持っているものをしっかり守る。あるいは、日本の持っている良いものを外国  
人にしっかり理解してもらえるようなシステムをつくる。恐らく、住民一人一人がそうい  
う意識・認識を持っていないときっと上手くいかないと思うのですが、私はそういうモデ  
ルをこの富岡市の皆さんにつくっていただけないかと強く期待しております。

今の霞が関の状況を見ても、皆様それぞれ守るべきものが多すぎて、国のレベルで果  
たす役割というのが、膨大な量になってしまい、真に抜本的な改革ができるのは、リーダ  
ーシップがあって、そのリーダーの目が細部まで行き届くような規模のまちなのではないか  
と思う訳です。例えば、ある知事さんのリーダーシップがあるからと言って、それが故に  
何かの分野で急に47都道府県でトップになる、恐らくそういう時代ではないのです。でき  
るとすれば、一人一人の住民の意識とか、あるいは一人一人の市民の考え方に手が届くと  
ころでお話しができる、納得してもらおうというところから変えられるとすると、やはり富  
岡市くらいの大きさのレベルから始めると、私は上手くいくのではないかと考えています。

これはもはや、外務公務員の言うべき話ではないのですが、私が外務省に入った目的、私がここに存在している意義は1つしか見出していません。そのためには、極端な話、自分の命が失われてもいいと思っているものです。それは何かというと「日本の真の国際化」この1点だけなのです。

外国に出て行って、フランス人や色々な国の人と話をして、この日本は、島国であることによって生じる良さもあると感じます。つい3日前に母校の岡山朝日高校で講演をしてきたのですが、「坎井之蛙(かんせいのあ)」という話をしました。「井の中の蛙大海を知らず」しかし、その先には話があるのだよという話です。「井の中の蛙大海を知らず、されど天の高さを知る」というのが正しい言い方だそうです。

私は、この日本という国は、あまりにも外国ときちんと触れて来なかった、鎖国を解いてまだせいぜい148年しか経っていません。世代でいうと5、6世代くらいでしょうか。そういう意味では、日本人の持つ外国に対する感覚は、まだまだヨーロッパの感覚とか、アメリカや中国の感覚と比較して、かなり特殊な部類に属していると思えます。

例えば、欧州は、英国等を除くと隣国同士国境を接していますから、その歴史とは隣国同士の領土の奪い合いです。フランス人に、フランスの歴史で一番彼らの心の傷として残っている出来事は何ですかと問うと、第一次世界大戦と返ってくる人が多いです。先の大戦といったら、京都の人に聞いたら応仁の乱と言うかもしれませんが(会場笑い)、ヨーロッパで言ったら第一次世界大戦です。第一次世界大戦は、ヨーロッパ全土を巻き込んだ総力戦で、フランスのどんな小さな村に行っても、従軍兵士の慰霊碑が必ずあります。ノルマンディを別として、第二次世界大戦の慰霊碑はフランスにはあまりありません。フランスは、第二次大戦ではパリをナチスドイツに占領され、大きな傷を負います。それでも、第一次世界大戦の方がはるかに彼らの心の傷になっています。戦後EU統合の思想的中心となったシューマンも仏だけで140万人が戦死した第一次大戦の悲惨さを引きずっています。あるいは、第一次世界大戦が終わった後に、欧州内の過激な争いを忌避する心理的作用が融和政策を産み、一方ではこれがドイツの増長を生んでしまったとも言われています。ヨーロッパ人、フランス人は、国境を越えて争い合い、殺し合うことの無残さ、残酷さを第一次世界大戦から学んだと言えます。フランス人からすると、国と国とのせめぎ合い、民族の交流、古くから言うとゲルマン民族の移動からなのですが、外国人と接することに何のわだかまりも、特別な付加的な意味も何もないのです。それが当たり前ののです。「お前ドイツ人、俺フランス人」以上、終わり。それだけの話なのです。

ドイツ人が偉い、フランス人が偉い、日本人が偉いという発想ではなくて、日本人が日本人と接するのと全く同じ発想でフランス人と接する。こういう時代になって欲しい。これが真の国際化だと私は考えています。

もうちょっとと言いましょ、これは、ちょっと言い過ぎなくらい言いますが、私は日本人の中にある、ある種特殊な感情を理解しています。EPA、経済連携協定というものがあります。今、TPPというものがありますね、あれのアジア各国版です。私は、そのE

PAの中にある「人の移動」という章を担当してまして、フィリピンの看護師さん、介護士さんを日本に受け入れるための制度設計を担当しました。私はフランスが専門と思われるかもしれませんが、一番外務省に貢献したのは、実はその部分だと思っています。それは、フィリピンモデルと言って、明治の開国以来というか、開闢<sup>かいびやく</sup>以来ですが、初めて外国人労働者を日本に本格的に受け入れるためのモデルを構築したということです。1年半の間に、フィリピンに23回出張に行き、交渉に交渉を重ねて最後、原則合意を取り付けたところで、フランスに赴任しました。

制度設計の過程で関係省庁、NGO、各種団体、様々な方と意見交換をしてきましたが、その中に「多くのフィリピン人労働者を入れることで、風紀が乱れるのではないか」と言う人がいて、私は「何を馬鹿なことを言っているのか」と主張しました。フィリピンは、我々の隣国である一つの立派な国です。その一つの国に対する接し方として、頭からそういう発想をするのは、まさにおかしいのではないかということです。フィリピン人看護師は、世界中で高い評価を得ているということがわかっていない。様々な方とお話をしていて、私は、日本人の中にある否定しがたい感情として、経済的に発展途上にあるある国の方の発言と、歴史的に先進国である例えばヨーロッパのある国の方で、双方から全く同じ、一言一句同じ発言があった場合、どちらの意見に心理的にさっと飛びつくだらうか、ということを感じざるを得ませんでした。日本人がそういう偏見を持っていると感じるのはひょっとしたら私だけかもしれません。ただ、多くの日本人と話す中で、我々日本人の中には、得体の知れない何かそのような途上国に対する優越意識があるように思えてなりませんでした。

そもそも、日本人はやはり島国に住んでいるが故に、異質なものに対して弱く、江戸時代からヨーロッパからの舶来ものに弱いのです。ものすごく顔に出ちゃうし、反応が異様。「人間は皆同じなのですよ」ということを考えると、私は日本が、日本の真の国際化を成し遂げない限り、この国が本当の意味での世界から尊敬を受ける立派な国になれないのではないかと思います。

最後に、本日の講演の趣旨とはやや異なりますが、ぜひ申し上げたいのは、異文化体験、異文化理解とは一体何であろうか？ということです「日本はこのような文化です」「フランスはこのような文化です」その違いが分かることが異文化理解なのかというと、私はそうは全然思わないのです。

今まで60か国ほど出張を含めて歩き回ってきましたが、その度に場末の飲み屋に入っていくと、どこの国でもその街の普通の人々が集う屋台に行き、そこでいわゆるローカルな経験をするのが大好きなのですが、そういったところで、色々な発見をしてきました。もちろん、文化も何もかも全部違います。考え方も随分違います。それでも、「私は異文化理解をしました」「異文化経験をしました」と言うつもりはまったくありません。

皆さん海外旅行に行かれますよね。それで「フランスに行ってかたつむりを食べました」



と。あるいは、「カエルを食べました」と。「フォアグラという、丸々と太らせたガチョウの肝臓を食べました」と旅行先でいろいろな事を見たり聞いたり経験します。私は、異文化体験、異文化理解、と言うことは単にそうことではないと思うのです。

かなり本質に近づいていると思うのですけれども、私の言うところの異文化理解というのは、結局、突き詰めて行くと、「我々は畢竟同じ人間じゃないか」というところまで行って、初めての異文化理解と言えるとそう堅く信じています。

全く異なるロジックで、全く異なる価値観で、その人と向かい合ってよく話をするのです。最初は違うところが気になるのですが、だんだん話をしていくうちに、なるほど、こいつは俺と同じ価値観の部分があるじゃないかと気付きます。そして、例えば酒を酌み交わし、馬鹿話の一つでもしているうちに、同じ人間だということまで達することができます。それが本当の異文化理解だと思う訳です。

普通に日本で就職するよりは、外務省に入って、かなり稀有な形で、自分の人格形成を失っているのでは、随分極端な意見だったかもしれません。他方、私は外国にいればいるほど祖国愛が芽生えるのです。この日本に対する愛情は、本当に天よりも高く、大海よりも広い。私は、ちっぽけなカエルかもしれませんが、その言葉だけはいつも忘れずに、この日本をいつも考えて、外国で生活をしている訳であります。

本日お話しさせていただいたことを、脱線が多かったので少しまとめさせていただきます。

富岡製糸場を通して、私自身も色々な人と合わせていただきましたし、人との出会いもございました。富岡製糸場があるが故に、皆様が守ってくださった故に、片倉工業さんが守ってくださった故に、新しい人との出会いがあり、私自身の成長にもつながったということです。個人的な感情から申し上げますと、感謝の言葉しかございません。まず、そのことを申し上げました。

2つ目には、日本の外交を通しましても、日仏関係に関しましても、この富岡製糸場というものが、非常に大きな役割を果たしたのは申したとおりです。歴史面のみならず、今後の未来においても、日本とフランスの交流の原点にこの製糸場があると思いますので、これを礎に更に発展していただきたいと思っております。

3つ目は、この富岡市の持っている、特異性、外国との接点です。フランス人の誰もが見るミシュランのギッド・ヴェール（緑のガイドブック）というものがあり、富岡製糸場もしっかりと載っています。あれに載っている所をフランス人は見学に歩きますから、ここにも、さらにたくさんのフランス人が来られると思います。その他の外国の方も大勢いらっしゃるでしょう。

外国の方との接点がある富岡のまちですので、まだ時間が 33 年間ありますから、今後 2050 年に向けて時間をかけて、日本の国際化を誘う、富岡モデルというものをぜひ作っていただきたいと、私の希望を申し上げて、講演を終えさせていただきます。

本当にありがとうございました。(拍手)

(なお、講演内容は個人の見解に基づくものです。)